

## 九州の大空に 朱鷺が舞う

2060年、パンパカパーン！ いよいよ日本の農業就業者数が100万人を切ろうかという年になった。それまで、農業、山林業従業人口を増やす努力はあった。一方、その減少を見越して、従来の労働集約的農業から粗放的農業に切り替える所も多々あった。またTPPとやらで、多くの農産品輸入が農の縮小に拍車をかけた。小型飛行機で空から種まきができる比較的広い田園地域には国際競争力があったが、棚田なんかは、観光用はともかく、稲の栽培としては壊滅状態に陥っていた。また過疎地においては田も畑も、多くは小規模ゆえに窮地に追い込まれていた。

苦悩の末の決断は何であったか。

一つは畜産への転換だ。乳牛、肉牛を問わず、飼牛の主たる生活空間を放牧場とすることでサバイバルを図ったのである。

放牧された牛は嬉々として走り回ってストレスを感じることがない。天候次第では、牛乳の濃い、薄いがある。それが自然なのに、いやだ、という消費者もいた。それでも構わない、値段も半額だし、と、次第に消費者が受け入れるところとなった。こうして日々の品質の均一性へのこだわりを捨てたのである。

一方、山林は別の意味で危機に瀕していた。他ならぬ、猪、シカの害である。他にも、サル、アライグマ、など、鼠算式に繁殖するが、猟友会も先細りで、あつという間に山村をわがもの顔に振る舞うようになって、田舎はもちろん、都市にも出没して人間生活を脅かすに至っていた。罾をかけても見回りだけでも大変だ。ところが牛の放牧にはその抑止効果が（宮崎県某市で確認された）あるということもあって、放牧（といっても一定の囲いの中）が盛んになってきたのだった。

冬場の干し草の輸入は最小限にとどめて野原の枯草を食わせた。そうすることで、手間暇かけずに牛乳が生産でき、そのバターもチーズも美味いとの評判で、それらの国内自給率は100%近くなった。思わぬハッピーな誤算！！

予想もしないことだったが、この地が一大娯楽の殿堂となった。それは一般市民に開放された、イノシシ狩り、シカ狩りである。週末になると狩りの服装に身を固めたにわか狩猟者が都会からわんさと山野に押しかけ、勢子が、声と太鼓で追い出すそれらをドスンとやった。男の中の男。そのステイタスともなってきた。かつての農夫は、勢子のアルバイトだけでも優に生活できるようになったし、狩りが済むと彼らはジビエ工場に向った。つまり、猟果はジビエとなって、新たに酒のつまみやジビエラーメンの覇を競うに至り、今や世界への輸出品として確固たる地位を占めている。シカ皮のグッズ、衣服もおしゃれ用に評判が高い。過疎地のあちこちに一大工場群が出現した。

それでもなお膨大な耕作放棄地が広がって、元の美田、美畑の復活は完全に諦められた。ここまできると、発想の転換しかなかった。

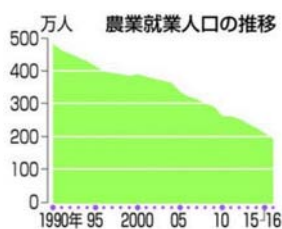
ある戦略家が以下を提案した。地域全体の鳥瞰的なゾーニングを行い、ゾーンごとの特色ある地域づくりをしよう！！ ①自然ゾーン、②半自然ゾーン、③人工ゾーン、そして④都市ゾーンである。

国立、県立公園は①のカテゴリーであって、人の手を加えることを厳しく制限、③、④はほぼ旧来通り。着目すべきは②である。このゾーンでは農薬を禁止し、与えても有機肥料だけとし、生息生物をできるだけ自然に任せた。こうして水質も問題ない湖沼、人の手が加わったビオトープによって生物の多様性が復元してきた。

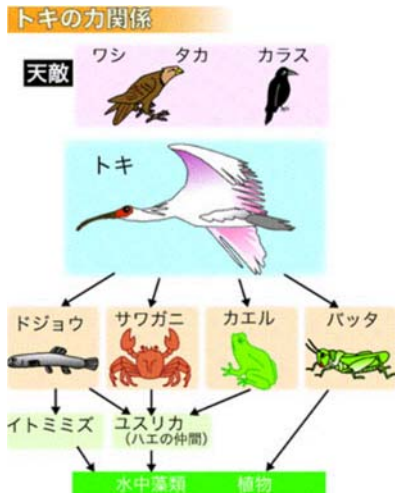
その上で、産官学・過疎市町村、市民が連携して設立した（一社）“朱鷺の舞う九州”が法人名どおりの活動をしたのである。朱鷺の好物はドジョウ。だがドジョウは、食物連鎖がうまく働かなければ自生しない。大分県産の大ぶりのドジョウは、のんきドジョウといい、生産者の一つは（株）築地網伍である。そのノウハウの提供を無償でお願いし、水を張った田畑で自生に近いドジョウの繁殖に成功した。ドジョウが増えたからといって、それだけで朱鷺が舞うわけではない。朱鷺が食するまでの間、まずはドジョウ鍋が食卓を賑わした。

トキ再生プロジェクトが実って、日本には中国産の朱鷺（かつて日本の上空を舞っていた朱鷺と同種）が 2019 年現在、佐渡島、他の自然の中に 406 羽生息している。トキ保護増殖事業計画の一つに分散飼育がある。これに名乗り出た出雲市に次いで“朱鷺の舞う九州”が、佐渡トキ保護センターからペアを受け入れて繁殖に努めてきた。一方、佐渡島での自然界の朱鷺がやがて 1,000 羽へと増え、佐渡島から本土への飛来も目撃されるに至った。佐渡とのペアのやり取りを盛んにしたせいも、2058 年、九州をふる里と慕う朱鷺が飛来し、ついに九州の大空にも舞う日がやってきた。九州生まれの朱鷺とのランデヴーがついに九州の大空を舞ったのである。時、2060 年 9 月 30 日。

時代は変わっていた。グローバリゼーションというのは、結局、国家の多国籍企業への奉仕体制、即ち、国民そっちのけ体制に過ぎないことを、アメリカファースト政権が言い始めた。令和元年が転換点で、日本も国内充実を図る政策に転換した。国土の 70% を山地が占める日本。人びとは花鳥風月の心を取り戻し、政府は、山地を活かす豊穰なる国土づくり、内需主導へと戦略転換した。その成功のシンボルが朱鷺の舞いだっただのである。



(写真家不明)



左図：トキの力関係。“水中藻類及び植物”が食物

連鎖の底辺にある。微妙な自然の摂理を実現することが決め手である。